



地獄坂を登ると、小樽商大の建物群の内、言語センターが最初に姿を現す。

特集 2 言語センター

理想的な教育環境を築き、北の外国語教育の未来をリードします

言語センター長 君羅 久則

本学は前身の小樽高等商業学校以来、全国的に「北の外国語学校」という異名をとるほど外国語教育の充実に努め、早くから英語、ドイツ語、フランス語だけではなく、中国語、ロシア語、スペイン語なども教授し、外国人教員を重用して実践を重んずる言語教育を行ってきました。この伝統が高く評価され、1991年には単科大学としては他に例を見ない言語センターが文部省省令施設として設置されました。現在では朝鮮語をも含めた7外国語を教授するとともに、年々数を増してきた

外国人留学生のために日本語科目も開講しています。

本学に入学した学生は、これらの外国語科目の他にも、言語学や言語文化論などを通して、言葉や文化の仕組みをより深く理解することができるようになります。さらに、3,4年次には、上級外国語、ビジネス英語といった、より高度な語学の習得も可能です。商学部であるにも拘らず、外国語の専門ゼミを受講する学生も少なくありません。特に英語の場合には、英文学、英語学等の教職科目を履修すれば、高等学校や中学校の英語の教員免許を取得することができます。1988年に本学卒業の中・高等学校の多くの教員と本学の教員が集まって教職研究会を発足させ、毎年研究会を開催しています。そして、2005年からは、大学院現代商学専攻に異文化理解とコミュニケーションに関する当センター担当の授業科目が開設され、英語の専修免許も取得可能となりました。

また、質の高い言語教育を実現するために、古くから語学実習室などの設備・施設を進取の精神で整備してきたことも本学の特色です。本格的なLLが1961年に導入されて以来、LL演習が必修として課されるなど、授業や学習の支援にLLは大きな成果を上げてきました。その後、言語学や心理学などの理

論に基づいた新しい教授法を積極的に取り入れ、2005年にはe-Learningシステムが利用可能なマルチメディアLL教室が導入されました。これと合わせ、コンピュータ支援語学実習室、マルチメディアホールなどの教室の他、豊富な教材をそろえ、学生が個別に自由に利用できるマルチメディアライブラリーなど、外国語教育・学習において、最新で利便性の高い環境の整備に努めています。

最近では、これらの人的・物的資源を有効活用し、1993年度から、英語、ロシア語、中国語についてネイティブスピーカーが担当する会話講座が好評のうちに続けられています。2004年度からは小樽市の委託事業として、職場研修リーダー養成のための語学研修(英語、中国語、韓国語)を実施するなど、地域貢献の推進にも余念はありません。

本学の卒業生として伊藤整や小林多喜二などの文学者がいるのは周知のことですが、商社など海外で活躍する卒業生も枚挙にいとまがありませんし、英文学や言語学などの研究者、大学教員になった卒業生も多数に上ります。こうした過去の実績を背景に、更なる外国語教育の発展を目指す小樽商科大学言語センターにこれからもご期待下さい。



1961年に導入された当時は先端的な本格的LLに関する新聞記事と写真。記事には「国立大学で初めて、ラングエッジ・ラボラトリー」を導入した、とある。